

---

# お嬢様と死刑囚

わだち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嬢様と死刑囚

### 【Nコード】

N9871S

### 【作者名】

わだち

### 【あらすじ】

凶悪犯を収容する流刑島で生まれ育った少女と、地下の独房に囚われた名もなき死刑囚。  
脱獄と誘拐からはじまる恋のお話。

カモメが随分と低いところを飛んでいた。

嵐が近い。

空は重く、まだ日が沈むには早い時刻だというのに周囲に広がる海も紺碧から黒へと深みを増している。湿った空気が海上に沈殿し、頬を打つ風は少しづつ勢いを増していく。やがて荒れ狂う風はとぐろを巻いて、雨雲を北の海から連れてきた。

雨は銃弾のように落ちてくる。

ごうごうと咆哮する潮騒。低く地響きをともなつて島の断崖へとぶつかる高波。飛沫が爆ぜ、そのたびに島全体が揺れるような激しい衝撃。しかし長年の間に巨大な要塞と化した石灰岩の孤島は、びくともせずに嵐の猛攻に耐えている。

島の守備兵たちはすでに船着き場に集合していた。

揃いの緋の軍服に身を包み、肩には銃剣を装着したマスケット銃。総勢三十名ほどの彼らは、濡れた栈橋から少し離れた空き地に二列になって整列し、海を白く霞ませるほどの暴雨に辛抱強く打たれている。視線はしっかりと東の地平線へと向けたまま。天気の良い日なら、その視線の先には町の明かりが小さな螢火のように点々と見える。しかし何度瞬いて重い滴を睫毛から払っても、今は何の光も見えなかった。

もうとつくに船の灯りが見えてもいい頃合だ

この嵐では、船は途中で難破してしまったのかもしれない。

誰も口に出しては言わなかったが、表情を見れば誰もがそう思っていることは明らかだった。

そうなればいい。

何の罪もない船乗りたちには哀れなことだが、それでも船が難破

すれば彼らの仕事は楽になる。こんな雨の中で腹をすかせて待つ必要もなくなるのだ。

囚人の護送船が流刑島に辿り着く前に沈んだからといって、誰が悲しむ？

死刑の烙印を押された命に、そもそも失われる価値などない。

その守備兵たちから三步ほど離れた前方に、この島の主であり、城砦司令官でもあるソレス男爵が立っていた。彼に従う兵たちを背に堂々と肩を張ってはいるが、その顔には疲労と皺がしっかりと刻まれている。五十歳。男盛りはとうに過ぎていた。

彼は溜息とともに、地平線から腰元へ視線を落とした。

隣に立つ人影は小さい。

雨避けのフード付きの外套がバタバタと風になびいている。夏とはいえ、雨は冷たい。濡れて水気を吸った外套はこの小さな身体には重いだろう。

「アルベルティーナ」

我が子の名を呼びかけて、つと口をつぐむ。

お前はもう、館へ戻りなさい、と口にすることは容易い。けれどそれを実行させるとなると、これが非常に難しい。目深にかぶったフードが飛ばされないよう、頬の両端で丸い手がしっかりと布地を握りしめている。軍服のくすんだ緋色とは違い、その外套は極上の真紅だ。フードの隙間からこぼれ落ちた髪は金。その豪華な金の巻き毛が一インチ長くなることに、彼はかつて愛した妻の面影を思い出す。

この子の母親も、これと同じ美しい髪をしていた。もし妻が生きていたのなら、日毎成長する娘と対峙するたびに鏡を見ているような気分になっただろう。熱病に犯されて醜くやつれ果てるまでは、エバレシア大陸一の美女として知られた女だった。

この子は日増しに美しく、そして高慢になっていく。ようやく八歳になったばかりだというのに、嵐を恐れる素振りさえない。彼が

渋い顔をして禁じても、こうしてこの場に同伴することを押し通した。

もっと厳しくしつけるべきだったのだろうが、身も世もなく愛した女の、たった一つの忘れ形見である。おまけにその女に瓜二つの顔をして、彼自身の血も引いているとなれば、叱責の言葉など満足に言えた試しがなかった。長い睫毛の下から、透き通るブルーグリーンの瞳で見つめられるだけで、望むものすべてを無条件に与えなくなってしまう。それは父であるソレス男爵だけでなく、島の守備兵たちや島で働く修道士たちもそうだったから、責められるべきは彼一人ではなかったが。

他に女のいないこの島では、たとえ幼子といえども美しいアルベルティーナに男たちの態度は甘い。

ソレス男爵がこの島の主なら、彼の娘は八歳にしてこの島の女王だった。

アルベルティーナは海を見つめ、凜と背を伸ばして立っている。

どんなに風が強く吹きつけようと、雨が頬を打とうと、決してうなだれることをしない。護送船に乗せられて運ばれてくる囚人を、ただじつと待っている。

<首切り島>。

町の人々には昔からそう呼ばれるこの島でアルベルティーナは生まれ、この島で育った。月に二度、船に乗って町へ買い出しに行くとき以外は、島から出ることはない。空いた牢獄でかくれんぼをし、鉄格子越しに囚人たちとままごとをした。囚人の中には、彼女に色んな異国の歌を教えてくれた男もいる。だから今さら、新しい囚人などもの珍しくもなかったけれど、今度の囚人は特別だった。

海がうねり、猛々しく風を蹴散らす。

アルベルティーナは憤ましい修道士たちにも色々なことを教わった。信仰をそのまま受け入れ入るにはすでに理知的になりすぎていたが、彼らの説く命の重さは、首を切られた死刑囚の姿を見て学ん

だ。なんて軽く、容易に奪われるものだろう。

けれど島に運ばれてくる死刑囚はそう多くはない。エバレシアの首都では、死刑制度に反対する声が年を経るごとに大きくなっていくという。それでも死刑の判決を下され、胸に“特一級”犯罪者の焼き印を押されて島へ送られてくる人間も、確かにいる。

やがて船で運ばれてくるはずの男も、その一人だった。

嵐の晩に、死刑囚がやってくる。

アルベルティーナは瞬きもせずに海を見つめた。

遠くの海に雷鳴が光った。

船の灯りが見えたのは、その直後だった。

船はゆっくりとカンテラの灯りを瞬かせた。一度、二度。間を置いてもう一度。着岸の合図。

砂袋をつけたもやい綱が投げられ、どさつと棧橋の上に落ちる。それを素早く守備兵の一人が抱え、手慣れた様子でビットにくくりつけた。

横風ぎに叩きつける風に、船体が大きく傾いている。

よく無事に辿り着けたものだ。

誰かが呟く。船乗りの熟練した腕前に対する賛嘆と、期待を裏切られた落胆に対する皮肉の入り混じった口調で。

船を降りる順番はいつも決まっている。

最初に銃を持った護送兵。それから囚人。

男は船を降りた。

長く歪んだ人影が動いただけで守備兵たちの間に緊張が走る。

両手首と足に鉄枷をつけられている状態では、荒れ狂う暴風雨のなか濡れた渡し板を渡るのは至難の業だ。けれど、男は僅かも体勢を崩すことなく棧橋へと辿り着く。

四方を固める護送兵たちよりも、頭一つ分背が高い。

筋肉の盛り上がった肩。引き締まった足腰。粗末な囚人服が雨に濡れて肌にはりついていているせいで、完璧に鍛え上げられた肉体が暗がりでもはつきりと分かる。カンテラの頼りない灯りに照らされて、男の肌は浅黒い。身体的特徴として色素の薄い人間の多いエバレスシアでは、珍しい肌色である。おそらく、異国の血が混じっている。背の高さや並はずれた体格からもそれは明らかだった。護送兵たちの顔が青ざめているのも、船の揺れのせいだけではないだろう。男の顔には目隠し用の布が首元まで被せられている。濡れて剥き出し

になった褐色の身体に黒いずた袋で顔を覆った姿は、何か異形の獣か、伝説に語られる悪魔の化身のようだ。

護送兵たちは、男に近づくのを恐れていた。

海がごうごうと喝采を上げている。

異様に緊迫した雰囲気の中で、男だけが落ち着いていた。

まるでこれから監獄へ向かうのではなく、ピクニックにでも出かけるような足取りだ。こんな雨でなければ、欠伸の一つさえ暢気にこぼしただろう。そう思わせるだけの余裕が、この男にはある。

死刑囚のくせに、

アルベルティーナは苦々しく思った。

怯えた囚人には軽蔑するし、傲慢な囚人を見れば滑稽だ。慈悲を乞うてくる囚人の手は一瞥もせずには払いのける。アルベルティーナは弱いものや惨めなもの、滑稽で哀れなものを嫌う。けれど一切慈悲を必要としないこの男の態度は、どうしてだか癪に障った。まるでこの島の女王たるアルベルティーナよりも、この男のほうが優位にいるようではないか。

(死刑囚のくせに。なぜ泣き崩れないの)

これがアルベルティーナの気を引いた。

アルベルティーナは父が隣でぎよっとするのもかまわず、慌てて制止しようと立ちはだかる護送兵たちを退け、その男に近づいた。

目隠しをされているから、男にはアルベルティーナの姿は見えない。

けれどアルベルティーナがすぐそばに立つと、男は足を止めた。

この嵐では足音が聞こえたりはしないが、男は気配で察したらしい。全身の感覚がアルベルティーナの存在に向けられているのが分かる。肌を視線でじつとりと舐められているような感触に、アルベルティーナは初めて男に対して一瞬、恐怖を感じた。小さな自分の身体よりも、男の身体は二倍も大きかったせいかもしれない。

自分の軟弱さに苛立ち、唇を噛んで、きつ、と男を見上げる。

「お前」

アルベルティーナの発した声は、吹き荒ぶ風の音に混じるには美しすぎた。

「屈みなさい」

男は僅かに首を傾げた。太い首の付け根がゆっくりと脈打つ。

「聞こえたでしょう？ わたしは、お前に屈めと命じたのよ」

ティーナ様、と誰かが不安げな口調で名を呼ぶ。硬くこわばった声。

死刑囚とは口を利くなとただでさえ父からはうるさく言い聞かせられていたのをそのときになって思い出す。思い出しただけで、アルベルティーナは気にしなかった。自分が望めば、必ず望むようになることをアルベルティーナは知っている。

どんなことでも。

この男だって。

「あんたは何だ？」

男が言った。

アルベルティーナの命じた通りに屈みもせず、どこか興味をそそられたような軽い口調で。

存外に男の声は低くなめらかで、穏やかな日の潮騒のように耳に心地よく響く。

「お前に名乗るほどわたしの名は安くはないの。屈みなさい」

再度告げると、男はじつとその場に佇んで動かなかった。

まるでその命令通りに行動することで得られるものを、冷静に吟味しているようだった。実際、その通りだったのだろう。男はゆっくりと膝を折り、アルベルティーナのそばに屈んだ。それでもアルベルティーナの視線は、男のそれよりも低かった。

アルベルティーナは男の頭巾をむしり取った。

驚愕に息を飲む気配と、悲鳴にも似たどよめきが背後で上がる。

男の顔は傷だらけで、片目は無惨に潰されていた。癒着してただれた目蓋を見れば、溶けた蠟を流し込まれて直接眼球を焼かれたの

だと分かる。拷問。間近で見れば、男の身体にも無数の傷跡が消えずに残っていた。

胸の中央には、真新しい焼き印が痛ましいほどに赤く皮膚を盛り上げている。

時が止まったように。

一つだけ残った瞳が、アルベルティーナの顔を見る。

アルベルティーナは息を飲んだ。

鉄灰色の瞳。

どこまでも透き通る銀の炎が、その瞳の奥で燃えていた。

「あんたは何だ」

男がもう一度、同じ言葉を口にする。

アルベルティーナはその瞳の炎に魅入られて、考える間もなく反射的に答えていた。

「……アルベルティーナ」

己の名を。

あるべるていな、と男が繰り返した響きはどこか舌足らずで、まだこの地の言葉にさほど慣れていないのだと、気づく。エバレシアの言葉も流暢に話せず、この異国の地でこの男は。

「ティーナ！ やめなさい！」

父の必死な制止を雨がかき消す。

男はアルベルティーナから目をそらさず、アルベルティーナも男から目をそらさなかった。

嵐が歌っている。

あとになってこの日のことを思い起こしても、アルベルティーナはなぜそんなことをしたのか分からなかった。

アルベルティーナは、ゆっくりと手を伸ばして男の頬に触れる。

あとになってこの日のことを思い起こし、男はその手の感触を今も覚えている、と幸福そうに笑った。

そして、男はその日を境に名前と自由を失った。

男に与えられた新しい名は、囚人番号四十三号。  
以後十一年間、男はその名で地下の独房に囚われ続けることにな  
る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9871s/>

---

お嬢様と死刑囚

2011年5月6日13時10分発行